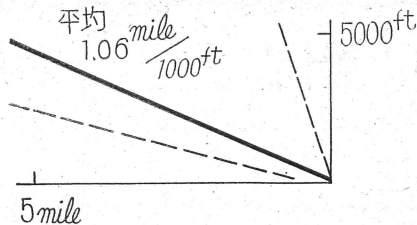


天気も悪く、鶴見附近の工場の煙の集中がB図上で特に強く出ている。

2月5日のBで線の立っている所は、いずれも飛行機と羽田を結ぶ視線の途中で鶴見、川崎の工場の煙突の煙がたなびいて他の部分はよいが、その煙の流れている所だけ帯状に視界をさざぎったために生じたもので、本来ならば、もっとスムーズに線が引かれるべき所である。

これらの例により、煙霧、煤煙が止対流面等で抑えられてたまっているPでは、斜方視程の状態曲線は逆転し且東京では、このPが300~5,000フィートくらいの所にあるらしいことが判る。つまりこの辺が東京上空の煙霧の濃い部分の高さの限界のようである。いさゝかデーターが少な過ぎるきらいがあるがA, B, Cの図より、状態曲線の平均を求めると、1.06哩/1,000ftになり、東京では1,000フィート高度が増すごとに約1哩の割合で普通の場合視程が良くなっていることになる。(悪天候の時はこちらがちがうであろう)

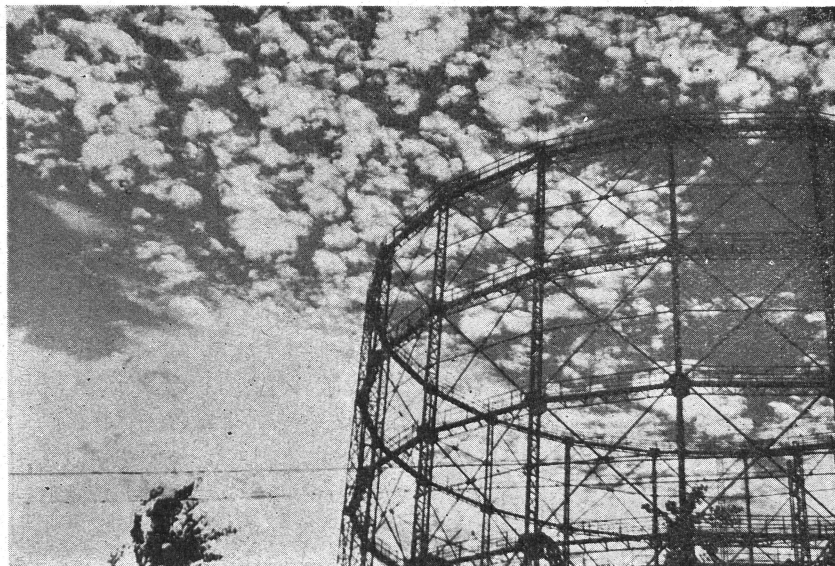


第7図 Slant VSBY 5000ft 迄の変化傾向

あとがき

以上、今冬行われた飛行機による視程観測の結果を羅列したが、何分にも飛行機種の関係で天気の良い時は飛行出来ず、そのためデーターも比較的天気の良い時に限られ、且、未だ充分な検討もされていないが、飛行機による視程観測は、日本では初めての試みであったので、ここに記した次第である。今後は今回の経験より煙霧の高度分布等の量的な観測も行い、更に系統的な観測を行う機会を得たいと思っている。(羽田航空地方気象台)

いわし雲 (鰯雲)



(伊東疆自撮影)

鰯雲炎えのこるもの地の涯に  
 鰯雲ひとに告ぐべきことならず  
 妻がゐて子がゐて孤独いわし雲  
 鰯雲出てゐたる日の東京市

石原 八束  
 加藤 楫郎  
 安佳 敦  
 たけし

鰯雲といふは、鰯などの群るゝ如く点々相みなぎるものを云ふなり。晴れたる日の夕暮など多く見ゆるなるが、雨気を含むものによ、さては水まき雲と同じかるべし。

芝浦の漁人も網を打忘れ

月には厭ふいわし雲かな

といへる狂歌。天明頃の人の詠にあり。青き空の半ほどこの雲白くつらなりてみなぎれる、風情ありて美はし。童兒などはこの雲を指さして、鰯の取るゝ兆なりといふもまたをかし。

(幸田露伴)